

地球上の生物は絶滅しちゃうんだと。28億年後に。

てことは、この世界より何より、僕達人類は早くいなくなっちゃうということか。

ウケる。

僕が神様だったら、28億年後とかケチ臭いことは言わずに、100年後くらいに設定しちゃうけどな。

すっかり習慣になった、メールボックスの確認。

とは言っても、内定なら出ているので、特にやらなければならないということもない。人類も僕も、取り敢えずの心配はいらない。未来の置き場ならあるということがわかった。中学の頃の夢は押し入れに、SEってやつを目指す。どちらもよくわからないけど、そんなものだろうと思う。刻々と変化する状況を前に、僕も変わる。誰だってそうだ。卒業アルバムの通りに生きていく奴も、生きたいと思う奴も、僕の周りにはいない。実際に思い出してみる。Jリーグが出来たばかりだったせいか、僕の周りにはサッカー選手になりたいという奴が多かった。その次に漫画家。その次くらいにお医者さん。もしか宇宙飛行士。

ちなみに、僕の場合は総理大臣。ありえないでしょ？小説家になりたいなんて時期もあったかな。夢なんてそんな感じで、未来について僕達が考えることなんて、その程度でしかないわけ。

上京して5年、僕もだいぶこの環境に慣れてきた。散歩とかしながら、次の曲の為のネタを探す。15分ぐらい歩くと、結構景色だって変わる。無駄に広い畑から、よくわからない工場。微妙な繁華街から、迷路みたいな宅地。徒歩5分毎にコンビニがあるだけ。無駄な幹線。深夜なんかだと歌いながら歩ける。昼間には、穴を埋めるように置かれた公園の中で、知らない子供達が遊んでいる。結構うるさくて、昼間に何回か叩き起こされたこともある。うちのアパートの壁に、何かぶついたりするんだ。そんなときには殺してやろうかと思うね、実際。

今日だって、一度叩き起こされて二度寝。「スローイン、スローイン」「ディフェンスライン上げてけ〜」て、そんな公園じゃないだろうが。ちゃんと起きたときには夕方。もう朝は寒いし、これぐらいでちょうどいいと思うね。やることが無いってのは幸せなことだ。卒論なんかどうとだってなるし。ゼミに知り合いはいないし。顔を洗い終わった丁度いいタイミングで携帯が鳴った。・・・呼び出し音は嫌いだから、ただのバイブだけど。

一応確かめてみる。彼女からだ。

いつからだったっけな、付き合ってることになったの。

仕方ない。散歩がてら行ってくるか。音楽を聴きながらの散歩は習慣になってる。昔はあんなに嫌いだったのにな、音楽。馬鹿が聞くもんだと思ってたよ。

テンテンテンと、女の子が壁蹴りをしている。みんなに置いていかれたのか、自主練とい

うやつなのか。家を出るときに目が合ったので、会釈はしておいた。額の前髪を払いながら、向こうも会釈は返してくれた。どちらにしろ、熱心な女の子だと思う。

色々あって、夜になった。別にエロい意味じゃないよ。取り敢えず帰る。

幸せなこと。

牛乳を切らしていたことを思い出し、スーパーに寄った。ついでにライムサワーも買って、帰り道で飲んだ。喉が乾いたってだけじゃなくて、星が綺麗だったし。少し寒かったしね。だけど強い酒は好きじゃないっていう、ちょっと贅沢な感じ。て、弱いだけか。

霞んでいく頭に音楽が聞こえる。ロずさんでみたら、ガンガンに響く。

向かい風が痛かったりして、もう冬だなあーて、思う。

「あ・・・」

やっと家に着いた。けど、音楽の隙間に滑り込んでくるもの。

テンテンテンと、音がする。

よくよく目を凝らしてみると、小さな灯りの下で、まだ壁蹴りをしていた。

イヤホンを外す。

「ねえ！！」

途端にテンテンテンが止んだ。ボールを抱えて、灯りの陰から僕を見てくる。

「好きなんだね、サッカー。凄く上手いし」

・・・やっちゃったかな？

でも、声をかけた手前、引き下がるわけにもいかない。わざと大袈裟に掛け声を付けて柵を越える。

「ごめん、怖がらせるつもりなんかじゃなくて、ただ、懐かしいなあ、なんて思っ」

「懐かしくないよ」

「いや、君の話じゃなくてね、お兄ちゃんにとってってこと。まだ難しいかな」

取り敢えずは言葉を返してくれて安心。

そう言えば、この公園の中に入るのって、初めてな気がする。

「お兄ちゃんもね、やってたんだよ、昔。君みたいに上手じゃなかったけど、Jリーグが出来た頃でさ。ラモスって選手が好きだったな。知ってる？ちょっと変な人だけど、人生もサッカーもハートだ～あって」

ラモスのダンスを真似てみたけど、いかんせん世代が違い過ぎるか。「ここ、この部分に大和魂がね・・・」て、少し酔ってるのかもしれない。

「よくわかんないよ」

「だよ、うん。ごめん」

ちょっと反省して、ちょっと黙る。いつからかめっきり下手になった。昔の僕って、どうやって友達作ってたんだっけ。いい塩梅に風が吹く。ヒュー、なんつって。

「・・・」

「・・・」

続く沈黙。意外と鬱陶しいし、風。何で話しかけちゃったんだ！？寂しそうだった？寂し
そうだったからか？

「あのさ・・・」

飛ばせ、ウィットに富んだジョーク！！

「生理って、知ってる？」

「・・・知らない」

やってる！やっちゃってるよ、僕！でも、知らなくて助かったぜ。

「知らないならいいんだ。うん、気になっちゃってね。スカート短すぎないかなあ、危ない
んじゃないかなあって。サッカーだし。うん。歳よりだからさ、お兄ちゃん」

「もしかして、お兄さん・・・」

「いや、ほんと気にしないで！どんなスカートでも君の自由だから！」

「・・・ロリコン？」

脱兎！！つっても、家の近くだしどうしよ！？まさかこのまま部屋を知らしめるわけにも
いかない。こんなときに限って酔ってるしさ。

「逃がすかよ、馬鹿」

「え・・・」

背後から怒声。それも獅子王凱みたいな。

高く上げられたボールに、漲っている何か。

「キャプチャーボオオオル！！」

ド〜〜〜ン

俺の右横、消し飛んだ滑り台。爆散！！

「えええええ！！」

「にやハハハ！！恐れ入ったか非人類畜生目！！これぞ我が最新兵器・・・心の正義を量子
化→再構成→蹴鞠玉にぶち込む！！結果！！我が愛の赴くままに自動追尾、人類の敵をお縄
にしてくれるという優れ物・・・まさにキャプチャー、警察力の鑑！！」

「追尾していないデストロイなんですけど？」

「にやハハハハハハハ！！警備の為なら何をしてもいいのだ！！」

ダメだ。何だかわからんが、とにかく話にならない。状況は一新された。

ここは帰宅だ！！籠城してやる！！

「その程度の策、恐るるに足らず」時代遅れのPHSが妖しく光る。「発信！！ポリスブレ
イバー！！」

ド〜〜〜ン

坂の上から白バイ。月を背に、闇夜を駆け上がるようにして変形(ヒト型)／巨大化(謎)
着地を兼ねて、僕達の暮らすアパート『幸せ荘』を押し潰した。

「うわああああああ！！みんなああ！！」

「心配無用。兼ねてより連絡、退去してもらっている」

「ま、まったく気付かなかったよ」

「当たり前だ！！ターゲットは貴様だからな、引きこもりの童貞め！！」

「ぐはあ！！」

隠してきた事実だけに痛い！！

「調べは付いているぞ！！美少女誘拐強姦魔死体遺棄及び売買媚薬擦り込み視姦型オナニ
スト！！諸々の罪で逮捕してやる！！」

でも、そんなに悪いことはしてない！！

ギラリと、女の子の手に、ベリービッグな大手錠。

「御縄頂戴ッ！！」

そのとき、僕はまだ知らなかった。

この町で何が起きているのか。

どんな恐ろしいことが起きていたのか。

僕達に何が起きて、僕が何を知るのか。

確かに、僕は平和で幸せに生きるただの一のオナニストだったけど、その陰で、本当に美
しい少女達が、誘拐され強姦され死体遺棄され売買され、媚薬まで擦り込まれていたという
こと。

ていうか、もっともっとやばいことが起きていたし、起きているということ。

長い長い夜の中で。

僕は知ることになる。